

伝統と革新!



# セミヨン・ビシュコフ 指揮 チェコ・フィルハーモニー 管弦楽団

パブロ・フェランデス チェロ

2023.

**10/28** (16:15開場)  
(土) 17:00 開演

愛知県芸術劇場コンサートホール

S¥25,000 A¥21,000 B¥17,000 C¥12,000  
D¥9,000 学生(抽選)¥3,000 (税込)

学生券 26歳以下 学生証提示  
中京テレビクリエイションHPよりエントリー優待抽選。詳しくは<https://cte.jp/gakusei/>をご覧ください。  
【一般席と並びでご購入されたい場合】公演1ヶ月前に現席がある場合限り、並びでご予約いただけます。  
詳しくは中京テレビクリエイションまでお問い合わせください。

子ども 無料招待  
【文化庁 劇場・音楽堂等の子供鑑賞体験支援事業】  
対象：小学生以上18歳以下(公演時点)  
詳しくは<https://cte.jp/41cf/>の公演ページをご覧ください。

ドヴォルザーク  
チェロ協奏曲  
交響曲 第8番  
ト長調 op. 88  
ロ短調 op. 104

プレイガイド [6/2(金)11:00~一般発売]

Chuチケ:052-308-8282 (平日11:00~17:00)  
<https://cte.jp/41cf/>

チケットぴあ:<https://t.pia.jp/> (Pコード:240-446)  
藝文プレイガイド:052-972-0430

公演に関するお問い合わせ

中京テレビクリエイション  
☎052-588-4477 (平日11:00~17:00)



# Czech Philharmonic Orchestra

美しい響きで聴衆を魅了するチェコ・フィル。

パリ管やドレスデン国立歌劇場などのシェフを歴任したピシュコフが音楽監督に就任してからは、すっかり機能的なオケに生まれ変わったかと思いきや、ピシュコフの主眼は独自のアイデンティティを大切にしながらボヘミア、スラヴと西欧のメンタリティの融合させ、独特な響きを残しつつ進歩させることにあるという。

チェコを代表する作曲家ドヴォルザークのチェロ協奏曲

(フェランデスは深く豊かな美しい音でエッセンバツハ、ムターから絶賛される気鋭の利器!)

と交響曲第8番を演奏。進化するチェコ・フィルの響きを。



©Marco Borggreve

## セミヨン・ピシュコフ (音楽監督・首席指揮者)

Semyon Bychkov, Music Director / Chief Conductor

1952年レニングラード(現・サンクトペテルブルグ)生まれ。1975年アメリカに移住し、1980年代半ばよりヨーロッパをベースに活躍している。ソヴィエト連邦を離れてから14年後の1989年、彼は母国に戻り、サンクトペテルブルグ・フィルハーモニー交響楽団の首席客演指揮者に就任。そして同年、パリ管弦楽団の音楽監督に就任した。また、その数年前からニューヨーク・フィル、ベルリン・フィル、ロイヤル・コンセルトヘボウ管などの楽団で活躍し、国際的なキャリアが活発になった。1997年にはケルン放送交響楽団の首席指揮者、1998年にはドレスデン国立歌劇場の首席指揮者に就任。2018年10月、チェコ・フィルハーモニー管弦楽団の首席指揮者・音楽監督としての任期をスタートさせた。ピシュコフは、欧米の主要オーケストラや歌劇場で指揮をしている。チェコ・フィルのタイトル他、BBC交響楽団の名誉称号も与えられ、BBCプロムスには毎年登場している。また王立音楽院では、チェコ・フィルと共に、2020年より教育プログラムのシリーズを立ち上げている。また2015年のインターナショナル・オペラ・アワードでは、「コンダクター・オブ・ザ・イヤー」に選出された。



©IGOR STUDIO

## パブロ・フェランデス (チェロ)

Pablo Ferrández, cello

1991年、スペインのマドリッド生まれ。13歳でマドリッドのソフィア王妃高等音楽院に入学し、ナタリア・シャコフスカヤの下で研鑽を積む。その後、ドイツのクロンベルク・アカデミーでフランス・ヘルメルソンに師事。2008年オーストリア、リーツェン国際コンクール優勝を機に頭角を現し、2013年にはパウロ国際チェロ・コンクール準優勝、エドモンドウ・ロスチャイルド賞を受賞。2015年にはチャイコフスキー国際コンクールに入賞。近年共演したオーケストラでは、ドゥダメル指揮ロサンゼルス・フィル、ガッティ指揮バイエルン放送交響楽団、エッセンバツハ指揮バンベルク交響楽団、アンネ・ゾフィー・ムターとのベートーヴェンの三重協奏曲とブラームスの二重協奏曲、ロンドン・フィル、イスラエル・フィル、ロッテルダム・フィル、ウィーン響などが挙げられる。リサイタルや室内楽では、ワディム・レービン、マルタ・アルゲリッチ、ギドン・クレーメル、ニコライ・ルガンスキーらと共演を重ねている。使用楽器は、日本音楽財団貸与のストラディヴァリウス 1696年製「ロード・アイレスフォード」。グレゴール・ピアティゴルスキー(1903-1976)が1946年から、ヤーノシュ・シュタルケル(1924-2013)が1950年から1965年にかけて使用した銘器である。

## チェコ・フィルハーモニー管弦楽団 Czech Philharmonic Orchestra

創設124年のチェコ・フィルハーモニー管弦楽団は、1896年1月4日に有名なルドルフィヌムでの創立公演でオール・ドヴォルザーク・プログラムを演奏したが、指揮をしたのは作曲家自身であった。チェコ・フィルは、祖国の作曲家の音楽の解釈において絶対的な信頼を得ていると同時に、ブラームス、チャイコフスキー、そして1908年に自作の交響曲第7番を同楽団で自ら指揮したマーラーの音楽との深い関係性が知られている。

チェコ・フィルの誇り高き歴史は、ヨーロッパの中心に本拠地を構える地域性と、チェコ共和国の不安定な政治の歴史を反映しており、スメタナの「わが祖国」が、強力なシンボルとなっている。

1945年、首席指揮者のラファエル・クーベリックが、チェコスロヴァキアの解放に感謝を捧げる公演で同曲を指揮し、その45年後にはまた、チェコスロヴァキアの最初の自由選挙を記念する曲に選んだ。そして2019/20年シーズンには、首席指揮者兼音楽監督のセミヨン・ピシュコフが、「わが祖国」を初めてチェコ・フィルと共に演奏する。ピシュコフとの2シーズン目には、共に取り組んでいる「チャイコフスキー・プロジェクト」が最高潮を迎え、テッカから同プロジェクトのボックス・セットが発売される他、プラハ、東京、ウィーン、パリで公演が予定されている。また同シーズン中には、台湾、ロシア、中国、スペインを訪れる他、チェコで、グラナート、ペリオ、デュティユー、マルティヌー、ブラームス、ショスタコーヴィチ、ベートーヴェン、マーラーの作品を演奏する予定。

チェコ・フィルの歴史を通じて、自国の作曲家たちの擁護と、音楽が持つ人生を変えるほどの力を信じるのが、その中心を貫いている。1920年代という早期より、ヴァーツラフ・ターリヒ(1919-41年の首席指揮者)は、労働者、若者、赤十字社、チェコスロヴァキア・ソコル(運動協会)、スラヴ女性連盟などのボランティア組織のためにコンサートを行う先駆者となり、1923年にはウィーン・フィルとベルリン・フィルの楽団員を含むロシア、オーストリア、ドイツの音楽家たちのための3つの慈善公演を行った。

その哲学は現在も大切に受け継がれている。総合的な教育戦略は、400を超える学校のあらゆる年代の生徒たちをルドルフィヌムに招き入れ、イダ・ケラロヴァが推進した、チェコ共和国とスロヴァキアのロマのコミュニティのための音楽と歌のプログラムは、社会から排除された家族たちに、自分たちの声をみつける機会を提供した。さらに2020年からは、イギリスの王立音楽院や中国、南京の江蘇大劇院と交換教育シリーズを実施する。

マルティヌーとヤナーチェクの音楽の古くからの擁護者であったように、自国の著名作曲家も新人も同じように理解し広めていく活動は、チェコ・フィルの活力の源泉となっている。ピシュコフとのコラボレーションにより、9人のチェコの作曲家たちへオーケストラ作品が委嘱されると同時に、国外の5人の作曲家にも作品を委嘱し、来シーズン以降に初演されることになっている。さらに同楽団は、年一回の若い作曲家のためのコンクールを開催しているが、これは2014年に、今は亡きイルジー・ピエロフラーヴェク(首席指揮者:2012-2017年)が立ち上げたものである。